

まちとの相互関係から見た共同墓地の可能性についての考察

正会員 ○北野 貴大*
正会員 横山 俊佑**
正会員 徳尾野 徹***

共同墓地 相互関係 生活
住宅地

1.研究の背景と目的

お墓とは普段の生活から縁遠いものである。にもかかわらず都市内にはいくつも人家に近接した共同墓地(いくつもの家のお墓が集まって形成されている霊園)が見受けられ、地域住民からは迷惑施設扱いを受けている。建設当初から100年以上も形を変えず、これからも変わらないだろう共同墓地は迷惑施設扱いされ続けるのか。しかし実際はオープンスペースとして街や住民との共生を果たし共同墓地の可能性までも引き出している事例もある。本研究ではその可能性を明らかにするべく、街に存在する共同墓地と住生活との相互的な関係を考察する。本研究では大阪市設墓地近辺を対象に住生活と共同墓地の相互的な関係をヒアリングすることで、共同墓地単体の評価ではなく地域や街の環境として一体的に調査する。

2.共同墓地について

2-1.都市計画上の共同墓地

都市計画における分類は公共空地の緑地と定義されており、公園と同じ扱いである。なおかつ十分な緑地などの面積の確保が規定されており、63 霊園中 41 霊園で墓地内の植栽が確認でき、16 霊園で公園などのオープンスペースが併設されている(表 1,図 1)。しかし、配置計画については、いま現在大阪市内に存在する共同墓地のほとんどが「市街地に近接せず」という規約に反している。

2-2.共同墓地の分布

大阪市内には市設共同墓地は 63 霊園存在する(図 2)。現在、共同墓地がある場所は建設された当時、田畑が広がっていた場所である。現行の都市計画のように、当時の

生活圏である大阪市中央部からは離れた郊外に墓地は建設されていた。現在の大阪市設の共同墓地 63 霊園中 44 霊園の共同墓地は住宅地の中にある(表 2)。大阪市中心部に集まっていた街や住宅地がスプロールし、建設当初は郊外であった共同墓地がいまとなっては住宅地になってしまい、人家に埋もれてしまった。

2-3.共同墓地と周辺環境

共同墓地のほとんどは塀や柵により、街との境界線が作られている。塀が存在しない墓地は市内に1つしかなく、イタズラ防止、墓地の確立や住宅地との距離を取るために境界をつくっていることがほとんどである。塀の高さや種類は様々で、目線を遥かに越えるようなものは全体の2割程度で、中の様子が伺えるくらいの塀の高さや窓のついた塀などが8割を占めた。そういった境界の作り方について、周辺環境との関係はあまり見受けられなかった。



図1:公園が併設されている墓地

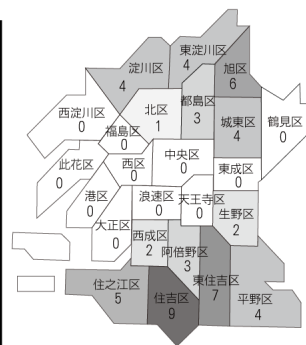


図2:大阪市内の市設墓地の分布

表 1:周辺環境ごとの共同墓地の数

道を挟んで					直接面している					斎場	霊園数	
戸建て住宅	マンション	工場	公園	駐車場	戸建て住宅	河川	公園	学校	線路			
○					○							22
○		○										9
○												6
○												4
○												4
	○											3
			○		○							3
○					○							3
			○									2
○												2
○									○			2
○												1
○									○			1
○										○		1

Consideration about the Posivity of Cemetery seen from the Town

KITANO Takahiro, YOKOYAMA Syunsuke
TOKUONO Tetsu

3.相互的な関係

3-1.先祖の住宅としての共同墓地

調査対象地のすべての墓地はとても綺麗に整えられていた。花や水の手入れも行き届いており墓地を持続させているコミュニティが存在することは明らかであった(表 3)。中の様子が伺える塀の墓地では墓地を気味悪く思わないどころか、お墓参りの姿をポジティブに評価する人やお墓が秩序を与えていることさえ読み取れる。これは共同体を維持するために他人を慮る考えであり、墓地が地域の秩序を生んでいる(表 4)。しかし、2m 以上の塀があり中の様子が見えない墓地は、地域住民からの印象が悪く迷惑施設という意識が強かった(表 5)。

3-2.公共物としての共同墓地

共同墓地を囲む道は住民によって領有化されやすい。特に墓地と住居に挟まれている道はおよそ 6 割の確率で領有化されている(表 2)。本研究では公共の場所(道や塀など)に物干しや植栽など個人の物を置いたり居座ったりして、自分の領域のように使うことを指す(図 3)。では物干しや植栽が、境界線のない道に連続的に表出していて、共有物として使っているところもある。

領有化が起きている道では地域住民の自然発生的なコミュニケーションが生まれるやすく、住民の孤独感が払拭されるとともに、道を領有することで地域への愛着も生まれている(表 6)。

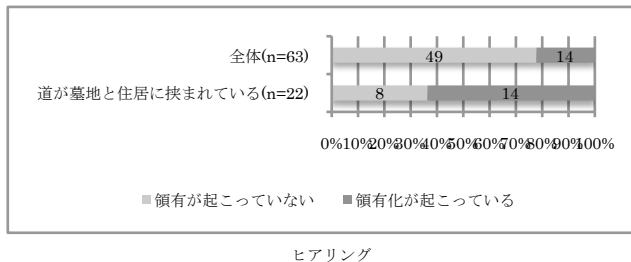
3-3.オープンスペースとしての共同墓地

周辺住民は共同墓地をオープンスペースとして有効に活用している(図 4)。日当たりが良いところには、植栽などがよく表れ、ベランダがあるにも関わらず墓地側の窓から布団などが干されている。住宅の外部(ベランダ、開口、前面道路)の活用が盛んになり、住宅の質を上げていることが読み取れる。

4.結論

非計画な宅地のスプロールにより人家に囲まれた共同墓地は、たくさん問題を生じているのに対し生活する力によって共同墓地の可能性が引き出され、共同墓地の質を転換させていることを証明した。特に共同墓地周囲の住宅では、墓地のオープンスペースとしての有効性や、墓地と住居に挟まれた空間がうまく活用され、共同墓地との共生を果たしていた。さらに安易に共同墓地を移設、拒絶しても住環境を悪化させるだけで、建築の計画による拒絶は必要以上に住民に迷惑施設というイメージを植えつけてしまっていることが分かった(表 5)。

表 2:領有化が起こる環境の割合



ヒアリング

表 3:墓参者に対するヒアリング

- [1]1~2ヶ月に1度くらいの頻度で来る
- [2]スーパーの買い物の帰りなどに寄る
- [3]15分くらいの滞在だが頻度良く来た

表 4:墓地の周辺住民に対するヒアリング 1

- [4]お墓参りの姿を見たら清々しい気持ちになる
- [5]いたずらしたら罰(ばち)が当たる

表 5:墓地の周辺住民に対するヒアリング 2

- [6]気味が悪い
- [7]お化けが出そう

表 6:墓地と住宅で挟まれた道を領有していた住民に対するヒアリング

- [8]前面の道路へ出る頻度は高い
- [9]隣の人と顔を合わせるようになり話すことも増えた
- [10]墓地周辺の迷惑駐車がなくなった
- [11]住んでいる街に愛着が増した



図 3:領有化の実態

図4オープンスペースとしての活用が見られる例(住吉雲園/n=51)



*大阪市立大学工学研究科前期博士課程
 **大阪市立大学工学研究科 教授・工博
 ***大阪市立大学工学研究科 講師・工博

*Master Course, Graduate School of Engineering, Osaka City University
 **Prof., Graduate School of Engineering, Osaka City University, Dr., Eng.
 ***Lect., Graduate School of Engineering, Osaka City University, Dr., Eng.